

観光客に群がる子ども



2009.11.05

たくましい子どもたち



先日、カトリック教会の山口・島根地区の大会が山口市で開かれた。そこで主に話し合われたのは、司祭、信徒の高齢化である。同地区には十八の教会がある。司祭の数は

二十七人、平均年齢は七十四歳。戦後、大勢の外国人宣教師が来日した。先進国となった今、外国人司祭が来日することはほとんどない。日本人の司祭への召し出しも少ない。

十年後の教会はどうなるのだろうか。司祭だけでなく、信徒の高齢化も目立つ。

これは教会だけの問題ではなく、日本全体の問題でもある。子ども、若者が多いと何か活気を感じる。

十五歳未満の子どもが国民の半数を占めるカンボジア



どっさり買ったお土産

では子どもの数に比べて学校や教師の数が少なく、小学校は午前と午後の二部制だ。今回のアンコール遺跡めぐりで土産物売りの子どもの多さに圧倒された。

カンボジアの印象を悪くするという声もある。確かにあまりの数としつこさに多少、閉口したのは事実だ。しかし、国民全体は貧しく、土産物売りの現金収入が家族にとつて貴重な収入であり、子どもまで働かねばならないのが現実だ。私は寄付の感覚で子どもから言われると協力的に買い求めた。

例えば十枚の絵はがきセットが一ドル、日本人の感覚では高くない。帰国してトランクを開けると出るわ出るわ、写真のものはその一部である。

しつこいと目くじらを立てず、好意的に見ると、何となくたくましい子どもたちだろうと感心させられる。

遺跡の中心はアンコール・ワットとアンコール・トム、それ以外の遺跡の土産物売りは「もう買ったと断れる。子どもたちも負けてはいない。次は笛や竹製品を売り始める。笛を売る子どもにも「フー・サンキユー」と断つても、日本の

童謡を吹いてみせる。そこまで努力されては、とついつい買い求めることになる。そのほか竹や木の玉のブレスレットなどを「みな買って見せ」みんな買ったから」と断ると「わたし、かわいそう」と悲しい顔をする。その日本語の使い方が実にうまい。

最後に訪れた遺跡では、入場券をチェックする横でデジカメで写真



2009.11.09

手際良く作られる額皿